

FLORA KANAGAWA

Mar. 1. 2015 No.79

神奈川県植物誌調査会ニュース第 79 号

〒 250-0031 小田原市入生田 499 神奈川県立生命の星・地球博物館内
神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp



図 1. ベンケイソウ (足柄下郡箱根町仙石原 2014.9.24 勝山輝男撮影).

神奈川県の本ケイソウ属 *Hylotelephium* H.Ohba

(勝山輝男)

『神奈川県植物誌 2001』では、ベンケイソウ属

の植物として、ミツバベンケイソウ *Hylotelephium verticillatum* (L.) H.Ohba とアオベンケイ *H. viride* (Makino) H.Ohba の 2 種が記録され、ミツバベンケイソウは葉山町・逗子市周辺と箱根仙石原

に、アオベンケイは丹沢山地の高所に分布点が打たれている。両種とも神奈川県内では生育地が限られ、個体数も少ないため、『神奈川県レッドデータ生物報告書 2006』ではミツバベンケイソウが絶滅危惧Ⅱ類、アオベンケイが絶滅危惧ⅠA類に選定された。ところが、箱根でミツバベンケイソウとされていたものはベンケイソウ *H. erythrostictum* (Miq.) H. Ohba であることが判明し、相模原市緑区でショウドシマベンケイソウ *H. verticillatum* var. *lithophilos* H. Ohba が新たに確認された。県内のベンケイソウ属は、箱根仙石原にベンケイソウ、逗子・葉山周辺にミツバベンケイソウ、相模原市緑区にショウドシマベンケイソウ、丹沢の高所にアオベンケイが分布することになる。以下に新たに確認されたベンケイソウとショウドシマベンケイソウについて、報告する。

ベンケイソウ *Hylotelephium erythrostictum* (Miq.) H. Ohba

2014年9月24日に箱根仙石原湿原ボランティアの方々と一緒に仙石原湿原を歩いたが、その際に井上香世子氏より、仙石原でミツバベンケイソウとされているものはミツバベンケイソウではなく、ベンケイソウではないかと指摘された。そこで皆でベンケイソウの生育している場所に行くと、ススキ草原の中で開花しているものを数株確認することができた(図1)。花はやや色が薄いが紫色を帯びており、ベンケイソウの可能性が高くなった。しかし、ミツバベンケイソウは変化が大きく、過去に仙石原で採集されたものがミツバベンケイソウとされていたことから、標本(KPM-NA0213156)を持ち帰り、ミツバベンケイソウやベンケイソウの標本と比較検討した。

生命の星・地球博物館には1998年(KPM-NA0112008)と2005年(KPM-NA0125036)に仙石原で採集された標本があり、ともにミツバベンケイソウとされていたが、これらの標本も含めて仙石原で採集された標本3点は、葉はすべて完全に互生し、短い柄があり、縁には低くて先が鈍い鋸歯があり、すべてベンケイソウとみなすことができた。

ベンケイソウは主にススキ草原にはえ、本州(中部以北)、九州、中国に分布する。古くから栽培されていたため、野生のものは栽培していたものが逃げ出したものと考えられた時期もあった。そのためか、『神奈川県植物目録』(1933)や『神奈川県植物誌』(1958)では栽培種として扱われて、『箱根植物目録』(松浦, 1958)には掲載されていない。林ほか(1961)では大山・姫次・世附を記

録しているが、証拠となる標本は確認できず、『神奈川県植物誌 2001』ではとりあげられなかった。ショウドシマベンケイソウ *Hylotelephium verticillatum* (L.) H. Ohba var. *lithophilos* H. Ohba

ショウドシマベンケイソウは香川県小豆島や岡山県西部の石灰岩地で採集された標本に基づいて、ミツバベンケイソウの変種として記載された植物である(Ohba, 1991)。主に岩場にはえ、葉は対生し、明らかな柄を有することでミツバベンケイソウと区別された。また、ショウドシマベンケイソウは葉に柄があることから、外形はアオベンケイに似ているが、子房に柄がないことからミツバベンケイソウに近いものとされた。その後、高知県(高知県・高知県牧野記念財団編, 2009)や東京都(東京都環境局自然環境部編, 2013)からも記録されている。

2009年11月7日に酒井藤夫・啓子両氏が採集されたベンケイソウ属植物(KPM-NA0165642)は岩場に生えていたもので、葉が多くは対生(一部3輪生するところがある)し、長さ1-1.5cmの明らかな葉柄があり、葉腋にむかごをつけ、葉身は長楕円形で、縁は浅い波状の鋸歯がある。翌年の10月3日に同所で採集された標本(KPM-NA0165643)はほとんどの葉が対生している。

今回、当館に納められているミツバベンケイソウの標本を見直したところ、これら2点の標本は、葉が一部3輪生しているの、ミツバベンケイソウとされていたが、香川県小豆島



図2. ショウドシマベンケイ(相模原市緑区 2010.10.3 酒井藤夫撮影)。

(KPM-NA0195655) と岡山県川上郡川上町 (KPM-NA0195626) で採集された標本とあわせて、葉が有柄で対生することからシヨウドシマベンケイソウと同定した。

ミツバベンケイソウ var. *verticillatum* は葉がふつうは3輪生し、柄はないか、あっても極めて短く、葉の縁にはやや尖った鋸歯がある。ときに葉腋にむかごをつけるものがあり、これはコモチミツバベンケイソウ form. *bulbiferum* Yonezawa という。

引用文献

林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江、1961. 丹沢山塊植物調査報告書. 林業試験場研究報告, (133): 1-128, pl.1-16.

松浦茂寿, 1958. 箱根植物目録. 90+25pp. 箱根博物会, 小田原.

Ohba, H., 1991. Two New Taxa of Hylotelephium from Japan (Crassulaceae). J. Jpn. Bot., 66: 63-69.

Ohba, H., 2001. Crassulaceae. K. Iwatsuki, D. E. Boufford & H. Ohba ed. Flora of Japan, 2b, pp.10-31. Kodansha, Tokyo.

東京都環境局自然環境部編, 2013. レッドデータブック東京 2013—東京都の保護上重要な野生生物種 (本土部) 解説版—. 655pp. 東京都環境局自然環境部, 東京.

小田原市久野で採集されたリトウザンヨモギ *Artemisia anomala* S. Moore

(勝山輝男)

2014年7月、小田原市久野の塔ノ峰林道の人工林内路傍で、中山博子・松岡輝宏・佐藤康の3氏が、葉が単葉で頭花が白色のヨモギ属物を発見された。調べたところ、中国南部～台湾に分布するリトウザンヨモギ *Artemisia anomala* S. Moore と判明した。これまでに帰化の報告はないので、日本新産の帰化植物として、中山博子氏撮影の生態写真(図1)を添えて報告する。以下に、採集された標本に基づく形態を記す。

多年草で、高さ1m以上になる。葉は互生、短い柄があり、葉身は狭卵形～披針形、長さ10-13cm、幅3-6cm、鋭尖頭、基部はくさび形、分裂せず、縁には鋭鋸歯があり、上面は無毛または微細な毛があり、下面は微細な綿毛を密生して帯白色。円錐花序は長さ約15cm、幅約10cm、多数の頭花をつける。頭花はほとんど柄がなく、楕円形、長さ2-2.5mm、幅約1.5mm、白色。総苞片は卵形または楕円形で鈍頭または円頭。

ネットで“*Artemisia anomala*”で検索すると、Flora of China (Lin *et al.* 2011) の記述と図を見ることができる。Flora of China では、葉の下面が無毛の var. *anomala* と有毛の var. *tomentella* Hand.-Mazz. の2変種に分けられている。久野で採集されたものは葉の下面に綿毛が密生することから var. *tomentella* にあたる。Flora of China の記述では、台湾に分布するものは基本変種の var. *anomala* とされているが、牧野・根本 (1931) のリトウザンヨモギ *A. anomala* の項では、台湾産の植物に対し、変種の区別はなく、「葉の下面は粉白・有毛」の記述がある。種内分類群の区別に若干の疑問が残る



図1. リトウザンヨモギ *Artemisia anomala* S. Moore (小田原市久野 2014.7.30 中山博子撮影)。



図2. リトウザンヨモギ *Artemisia anomala* S. Moore (小田原市久野 2014.7.30 中山博子撮影)。

が、和名はリトウザンヨモギとして記録しておく。
標本：小田原市久野塔ノ峰林道，中山博子・松山美帆 no.2014-0730-32 2014.7.30, KPM-NA0213089.

引用文献

牧野富太郎・根本莞爾，1931. 訂正増補日本植物総覧. xix+1936+3pp. 春陽堂，東京.

Lin, Y. R., Shi, Z., Humphries, C. J. & Gilbert, M. G. 2011. Anthemideae. in: Wu, Z. Y., Raven, P. H. & Hong, D. Y., eds., Flora of China Volume 20–21 (Asteraceae). pp. 653–773. Science Press & Missouri Botanical Garden Press, Beijing & St. Louis.

56年ぶりのタチヒメワラビの発見

(田村 淳・中西のりこ・指村奈穂子
・長澤展子・野辺陽子)

著者の田村と中西は神奈川県自然環境保全センターに勤務しており，田村は研究連携課で各種事業のモニタリングを担当し，中西は自然公園課で登山道の整備やシカから植物を守る植生保護柵の設置を担当している．2014年夏季に田村と中西，それに調査仲間の指村，長澤，野辺の5名で植生保護柵内の植物の回復状況を調査したところ，本県では絶滅種とされているタチヒメワラビ *Thelypteris bukoensis* (Tagawa) Ching (ヒメシダ科) を56年ぶりに発見したので報告する．

タチヒメワラビは本州の岩手県から中部地方にかけてと，四国（高知県），九州（熊本県），中国，インドに分布するシダ植物である（倉田・中池，1983，1997）．県内での最初の記録は，1956年に丹沢山地の不動ノ峰で倉田 悟により発見されたものである（大谷，1970）．この倉田の記録は山と溪谷社発行の『カラー樹の花2』のミネヤナギ（ミヤマヤナギ）の項で紹介されている（倉田，1969）．1958年には同じく不動ノ峰で西尾和子と田代信二により標本が採取され，西尾のものは県立生命の星・地球博物館に，田代のものは国立科学博物館に収蔵されている（倉田・中池，1983）．その後の記録は途絶え，『神奈川県レッドデータ生物調査報告書1995』（以下県RD1995，神奈川県レッドデータ生物調査団，1995）と『同2006』（以下県RD2006，高桑・勝山・木場，2006）ではともに絶滅種として扱われていた．丹沢の周辺では，田村が山梨県の御正体山（2013年）や三ツ峠山（2005年），御坂山（2008年）で記録している．

タチヒメワラビがあったのは過去の記録と同じ



図1. タチヒメワラビ（相模原市緑区不動ノ峰 2014.7.28 田村 淳撮影）.

不動ノ峰であり，柵内でシロヨメナやテンニンソウと混生し，5m四方の範囲に25～50株が生育していた．胞子を付けた葉も複数あった．倉田（1969）の『カラー樹の花2』には「神奈川県では新記録と思われるタチヒメワラビを採集したのは不動ガ峰（1610m）付近の草原の中だった．」と記録されている．不動ノ峰は現在でもミヤマクマザサ草原が広がっている．しかし，筆者らが発見したのは林縁部であることから，倉田の発見した地点とは厳密には異なる可能性がある．

筆者らはこれまでに丹沢山地の柵内調査からタチヒメワラビを含めて合計28種の県絶滅危惧種を発見してきた．その中の4種（イッポンワラビ，タチヒメワラビ，ノビネチドリ，クガイソウ）は県RD1995または県RD2006で絶滅種として扱われていた種である．絶滅したと思われていた種が柵内で発見されたことは，柵には植物の回復の効果があること，すなわち矮小化した個体や地中に残存していた地下器官，埋土種子から成長，成熟させる機能があることを意味している．今回発見したタチヒメワラビは丹沢の近隣山地から新たに胞子で侵入してきて成長した可能性もあるが，56年前と同じ場所で再発見されたこともあり，以前から現地にあった可能性が高い．人間側の判断で絶滅扱いにしても，植物はそう簡単にシカの影響で絶滅しないことをタチヒメワラビの再発見は物

語っているようである。

標本：相模原市緑区不動ノ峰（標高 1578m）田村淳 2014.7.28 TA14145 KPM-NA0174942; TA14146 KPM-NA0174943（丹沢大山国定公園特別保護地区採取許可番号：神奈川県指令自環第 702 号）

引用文献

- 神奈川県レッドデータ生物調査団編，1995. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 . 257pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原 .
- 倉田悟，1969. カラー樹の花 2. 199pp. 山と溪谷社，東京 .
- 倉田悟・中池敏之編，1983. 日本のシダ植物図鑑 3. 728pp. 東京大学出版会，東京 .
- 倉田悟・中池敏之編，1997. 日本のシダ植物図鑑 8. 473pp. 東京大学出版会，東京 .
- 大谷茂，1970. 神奈川県の羊歯植物 (5). 横須賀市博物館研究報告 16:44-57.
- 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編，2006. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. 442pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原 .

横浜市にオオバクサフジが残されている

(中島 稔)

『横浜の植物』（横浜植物会編，2003）のオオバクサフジ *Vicia pseudo-orobus* Fisch. et C.A.Mey. の項には、その分布が以下のように記述、解説されている。

〔市内〕『横植誌 68』では土手，路傍，草地に少ないとあり，下記の標本が残されている（昭和 20 年代に保土ヶ谷区と旭区で採取された標本が引用）。『横植誌 88』では市内からは採取されず，今回の調査でも確認されなかった。

この記述からすると，横浜市内では絶滅したと思われるようだが，都筑区の一角にわずかに残されているので報告したい。

場所は都筑区荏田南の元来丘陵であった一角を造成，宅地にした新興住宅地。その一部が横浜市有地のベルト状グリーンゾーンとして，低い金網フェンス設置により立ち入りできない状態になっている。その為グリーンゾーン内のオオバクサフジは長年保護された状態で生き残ってきたようだ。フェンス内側には毎年何株か発生するが，時々市による草刈りが行われ刈り取られてしまう。

刈り取られた株は，意外と丈夫でその後再成長，時期遅れの 12 月ころ開花を見，びっくりさせられる。フェンスから飛び出した花柄。草丈は 1m を越えるので，これを採集し，生命の星・地球博

物館に証拠標本として収めた。毎年行われる草刈りで相当弱っているのので，近々絶滅してしまうのではと危惧される。

標本：横浜市都筑区荏田南町 中島 稔 2013.12.10. KPM-NA0169059.

引用文献

- 横浜植物会編，2003. 横浜の植物 . 32pls.+1325pp. 横浜植物会 横浜 .



図 1. オオバクフジ（横浜市都筑区荏田南町 2013.12.10 中島 稔撮影）。

2014 年の栄区の植物調査から

(林 辰雄)

飯島町（飯島市民の森）

コンロンソウ：『神植誌 01』では、「コンロンソウは県内ではきわめて稀で」となっているが，飯島市民の森では以前から小さな群生が見られ，今もほとんど変わらない状態で推移している。神奈川県で稀ならばこの群落は貴重なものだが，本来の自生かどうかはよく分からない。飯島市民の森が開園したのは 1974（昭和 48）年で，その頃はコンロンソウは見られなかった。初めて気がついたのは今から 15 年前頃だったと思う。「せせらぎ緑道」ができたときに，何処からか持ってきた土で造成した結果ではないかと想像している。花は 4 月下旬から 5 月上旬に見られる。

クロヤツシロラン：2014 年 9 月 20 日に歩いた時に高さ 15 cm ほどの朔果をつけたものを 7 本発見した。朔果だけではアキザキヤツシロランとの違いがよく分からないが，クロヤツシロランの方が見る機会がはるかに多いようなので，ひとまずクロヤツシロランとして扱い，今年，花を見つけて同定したい。

ナルコスゲ：「せせらぎ緑道」の流れの中の直径 20 cm ほどの石に，びっしりついているナルコス



図 1. コシロソウ (横浜市栄区飯島市民の守 2017.4.30 林 辰雄 撮影).

ゲを 2014 年 5 月 7 日に初めて気がついた。今後下流に種子が流れればもっと増える可能性がある。

キッコウハグマ：約 25 株前後が増減なく毎年見られる。小さな草姿や遅い花期、閉鎖花が多いなどの特徴で、目立たない存在である。

コウヤボウキ：2013 年までは、コナラなどの株元に群生していたが 2014 年 10 月 19 日に行った際には株数が激減していた。原因は不明。

キツネノカミソリ：かつては群生していたが、いまは数えるほどしか見られず、近い将来消滅するかもしれない。

ツクバキンモンソウ：初めて記録した。数株だが、目立たない花でもり、これからも増えてゆくと思われる。

フデリンドウ：数年 1 株 2 株が花をつけていたが 2014 年はいつもの場所で見られなかった。

飯島町 (飯島団地)

雑木林を切り開いて造成した団地なので、いまでもわずかに雑木林が残り、林縁には名残のウグイスカグラ、ノガリヤス、シラヤマギクなどが見られ、コヤブタバコも毎年 10 数株があまり増減なく花をつけている。少し離れた草原にはウマノズクサもたくさん見られるが、定期的な草刈りのせいか花をつけた株は見られない。

コヤブタバコとウマノズクサは『神植誌 01』の分布図には、栄区には採集記号がついていない。

亀井町

鎌倉古道と呼ばれる道にニリンソウの群生地があり貴重な場所だったが、最近、ニリンソウの真ん中を野菜畑にしたため、群落は二分された状態で花をつけている。近くにはイチリンソウやヤマエンゴサクがごくわずか残っている。

その他

いたち川の天神橋下でオオフサモを、長沼町でヤドリギを記録。どちらもすでに採集記録はあるが、私にとっては初めて確認したものである。

分布を拡大するヨシススキ

(大西 亘)

2014 年末、西湘シダ勉強会 (本号 931-932 頁参照) から、11 月に真鶴町の山中でヨシススキ *Saccharum arundinaceum* Retz. (*Erianthus arundinaceus* (Retz.) Jesw.) を採集したとの情報をいただいた。ほぼ時を同じくして、宮崎大学の西脇亜也さんからも、2014 年秋に藤沢市役所近辺でヨシススキを見かけた、との情報をお寄せいただいた。西脇さんによると、これまで指摘されていた栽培品の逸出以外にも、特に関東以西の道路法面緑化地で使われているようだ、とのことであった。ヨシススキは県植誌 2001 では記載がないが、県博の標本を見ると県内では、2011 年に大磯町 (花水川土手)、2012 年に大和市で、それぞれ採集されている。先日、真鶴町の生育地を西湘シダ勉強会のメンバーにご案内いただき、状況を目の当たりにした。現場は、山中を走る広域農道沿いで、横切る尾根を切通し状に開削した道路両側の法面であった。法面全体がほぼヨシススキで覆われていることから (図 1)、法面緑化の目的でヨシススキが植えられたものと考えられる。また、法面以外にも付近の道路沿いに散発的に生育が見られ、分布を拡大しているものと考えられた。この様子だと、県内各地にも植栽されて広がっているかもしれない。今夏は注意して探してみたい。

標本：大磯町高麗 増子 忠治 2011.10 KPM-



図 1. 図 1. 道路沿いの斜面を覆うヨシススキ。神奈川県真鶴町岩 2015 年 1 月 23 日 N35.176645, E139.124792.

NA0201254 ほか1点；大和市草柳 松本雅人 2012.11.11 KPM-NA0202545；真鶴町岩 西湘シダ勉強会 2014.11.18 KPM-NA0292789 ほか。



図2. ヨシススキの特徴(左), 果実期の小穂の比較. ヨシススキ(右上), ススキ(右下).

ヨシススキの特徴：葉鞘内側に連なる葉面の基部に、中肋を挟んで長さ数ミリの毛が密生(図2. 左)。生時には葉鞘外側にも同様の毛が多数目立つが、変異がある。多数の稈が叢生し、稈の基部は直径2 cm程度になる。高さは2-4 mに達する。県内で記録のある同属の在来稀産種ワセオバナは大きくても1 mを超える程度で、葉面基部内側に長い毛が密生することはない。

ススキ属との区別：ヨシススキを含むワセオバナ属では、果実期には総の中軸が折れてバラバラになる(図2. 右上)。ススキ属では、小穂が落ちた後にも総の中軸や小穂の柄が残る(図2. 右下)。また、ワセオバナ属の小花にはノギが無い。

ヨシ類などとの区別：ヨシ類、ダンチク、パンパスグラスとは、小穂が数個の小花で構成される点で区別できる(ワセオバナ属やススキ属の小穂は2小花(うち1つは退化)からなる)。

『神奈川県植物誌2001』刊行後に記録された神奈川県新産の帰化植物

(田中徳久)

田中ほか(2002)によると、『神奈川県植物誌2001』(神奈川県植物誌調査会編, 2001；以下『神植誌01』)には、『神奈川県植物誌2001』(神奈川県植物誌調査会編, 1988；以下『神植誌88』)刊行後の調査で発見され、学会誌やFlora Kanagawaなどに報告されたものも含むと、日本新産62分類群、神奈川県新産138分類群の帰化植物が掲載されていることが報告されている。

神奈川県植物誌調査会では、現在、次の植物誌

に向け、精力的に調査を進めているが、『神植誌01』刊行後、多くの神奈川県新産の帰化植物が報告されている。新しい植物誌の刊行まで3年を切り、編集委員会においてさまざまに議論を行い、執筆担当者も決めなければならない段階にあり、今後、執筆担当者向けの確認用標本リストを作成し、各標本庫で標本の同定確認作業を実施するが、『神植誌01』後に記録された種も、言うまでもなく次の植物誌に漏れないように掲載しなければならない。しかし、ここであげた一部の記録も該当するが、『神植誌01』以前の記録(標本)がありながら、『神植誌01』からは漏れてしまったものもある。このような事態を極力避けるため、学会誌やFlora Kanagawaに報告されている神奈川県新産の帰化植物のリストを作成し、今後の参考とすることとした。ただし、執筆者になられた方は、この報文に頼ることなく、各種記録の精査にご尽力いただければと思う。

漏れがあるリストでは備忘録にはならないが、植物誌でもレッドデータブックでも、形になると多くの追加情報が寄せられる傾向がある。未報告の神奈川県新産の帰化植物の情報をお持ちの標本採集者あるいは標本管理者の方々は、極力、Flora Kanagawaに投稿いただけますようお願いいたします。

以下の目録は、『神植誌01』刊行後、学会誌やFlora Kanagawaに報告されている神奈川県新産の帰化植物をまとめたもので、発表順に配列した。国内帰化の例も一部含み、学名は報告時のものを示した。報文の引用は、本文中に簡略に示し、標本は、一部を除くとその後の同定変更などは反映されておらず、報告時の標本番号のみを記した(一部チェックリスト作成用の標本データベースを参照した)。

ヒメクリノイガ *Cenchrus longispinus* (Hack.) Fernard.
(勝山, 2002. FK53: 636-637). KPM-NA1061052.

ホウキヌカキビ *Panicum scoparium* Lam. (勝山, 2002. FK53: 638) KPM-NA0104870.

ツメクサダマシ *Trifolium fragiferum* L. (金子, 2002. FK53: 640) KPM-NA0122083 ※新産ではなく63年振りの記録。

シバツメクサ *Scleranthus annuus* L. (田中, 2002. FK53: 640.) KPM-NA0122066.

イトアゼガヤ *Leptochloa panicea* (Retz.) Ohwi (佐藤, 2003. FK54: 646) KPM-NA0122574.

クキゲミチタネツケバナ *Cardamine hirsuta* L. ? (堀内, 2003. 千葉県植物誌, pp.249-250; 堀内, 2003. FK54: 647-651) KPM-NA0100787; 0113819;

- SCM16373.
 フウセンツメクサ *Trifolium tomentosum*? (佐々木, 2003. FK54: 652-654) KPM-NA0123248.
 ニセカラクサケマン *Fumaria capreolata* L. (秋山, 2003. FK55: 664-665) SCM16538; KPM-NA0202488.
 ハリゲナタネ *Brassica tournefortii* Gouan (城川, 2003. FK55: 668-670) KPM-NA0112751; KPM-NA0118627.
 キンギンナスビモドキ *Solanum viarum* Dunal (勝山, 2003. FK55: 672) KPM-NA0076979; 0123315
 ※未同定であったが学名が判明したもの。
 ツクシマンテマ *Silene norcturna* L. (高橋, 2003. FK55: 672-673).
 サルマ *Satuma henryi* Oliv. (野津・佐々木, 2003. FK55: 684) KPM-NA0150961-0150963.
 サヤシロスゲ *Carex gravior* L.H.Bailey var. *lunelliana* (Mack.) F.J.Herm. (勝山, 2003. 神奈川県博研報 (32): 1-6; 勝山, 2003. FK55: 688-689) KPM-NA0122071; 0122072.
 ズングリオヒシバ *Eleusine tristachya* (Lam.) Lam. (木場, 2003. 神奈川県博研報 (32): 69-70; 木場, 2003. FK55: 689-690) KPM-NA0122274; 0122275; 0122276.
 セイヨウチャヒキ *Avena strigosa* Schreb. (木場, 2003. FK55: 690) KPM-NA0114780; 0116743; 0119989.
 コモチナデシコ *Petrorhagia prolifera* (L.) P.W.Ball & Heywood (勝山, 2003. FK56: 701-703) KPM-NA1107431; 1107599.
 イヌコモチナデシコ? *Petrorhagia velutina* (Guss.) P.W.Ball & Heywood (勝山, 2003. FK56: 701-703) KPM-NA0108537; 1035798 ほか
 フトエバラモンギク *Tragopogon dubius* Scop. (勝山, 2003. FK56: 701-703) KPM-NA1100411.
 ?バラモンギク *Tragopogon prantensis*? (勝山, 2003. FK56: 701-703) HCM73018; 75795. ※この平塚市博物館の標本は同定が変更されている (勝山, 私信).
 オオトキワユツクサ *Tradescandia albiflora* Kunth (勝山, 2003. FK56: 701-703) 標本多数.
 ヒロハウラジロヨモギ *Artemisia stolonifera* (Maxim.) Kom. (和田ほか, 2003. FK56: 705-706) KPM-NA0162691-0162695.
 ノレンガヤ *Lamarckia aurea* (L.) Moench (勝山・歌川, 2004. FK57: 709-710)
 マドリードチャヒキ *Bromus madritensis* L. (勝山, 2004. FK57: 712) KPM-NA0123332-0123333.
 コケイラクサ *Soleirolia soleirolii* (Req.) Dabdy (勝山, 2004. FK57: 712) KPM-NA0123591; KPM-NA0144136.
 ダットンソバ *Fagopyrum tataricum* (L.) Gaertn. (勝山, 2004. FK57: 712) KPM-NA0123407.
 ルリハツカ *Amethystea caerulea* L. (勝山, 2004. FK57: 712) KPM-NA0123410.
 イチゲフウロ *Geranium sibiricum* L. (勝山, 2004. FK57: 712) KPM-NA0123698.
 クキナシマツヨイグサ *Oenothera triloba* Nutt. (木場, 2004. FK58: 718-719) KPM-NA0123950-0123951.
 キクバアリタソウ *Chenopodium foetidum* Schrad. (勝山, 2004. FK58: 725) KPM-NA0123411; 0123412; 0123413.
 ヘンペイソウ *Uniola latifolia* Michx. → *Chasmanthium latifolium* (Michx.) H.O.Yates (木場, 2005. FK59: 728-729) KPM-NA0132282.
 チュウゴクカラスムギ *Avena chinensis* (Fisch. ex Roem. & Schult.) Metzg. (木場, 2005. FK59: 731-732) KPM-NA0124116.
 ヒトツノコシカニツリ *Ventenata dubia* (Leers) Coss. (木場, 2006. FK61: 758-759) KPM-NA0124092; 0124093.
 アメリカフウチョウソウ *Cleome rutidosperma* DC. (佐々木, 2006. FK63: 780-781) KPM-NA0125925; 0125927.
 ヒナツメクサ *Torifolium resupinatum* L. (佐々木, 2006. FK63: 782-783) KPM-NA0125612; 0125926.
 シロガネチカラシバ (ギングツネ) *Pennisetum villosum* R.Br. ex Fresen. (金子・古川, 2006. FK63: 783-785).
 クルマバヒメハギ *Polygala verticillata* L. ※『神植誌 01』以前の記録があるが未掲載。
 ムラサキナギナタガヤ *Vulpia octoflora* (Walt.) Rydb. (木場, 2007. FK64: 793-794) KPM-NA0126330; 0126350.
 オオアゼテンツキ *Fimbristylis bisumbellata* (Forssk.) Bubani (勝山, 2007. FK64: 797-798) KPM-NA0125931.
 ツルコウゾ *Broussonetia kaempferi* Siebold (勝山, 2007. FK65: 804) KPM-NA0128632; 0128633 ※国内帰化?。
 カロリナアオイゴケ *Dichondra repens* Forst. var. *carolinensis* Choisy. (堀内, 2007. FK65: 806-807; 勝山, 2008. FK66: 812-813) KPM-NA0178638 ※生命の星・地球博物館の神奈川県産の標本は、在来種のアオイゴケ *Dichondra micrantha* Urb. であった (勝山, 私信).

ハリゲヤグルマハッカ *Monarda dispersa* Small (城川, 2008. FK66: 813-814).
ミズヒマワリ *Gymnocoronis spilanthoides* (D. Don ex Hook. et Arn.) DC. (吉田, 2008. FK66: 816) KYS182990.
シマツユクサ *Commelina diffusa* Brum f. (勝山, 2008. FK67: 822-823; 勝山, 2013. FK75: 896-900) KPM-NA0133019; KPM-NA0133020; 0133021; 0148071.
※一部引用標本はその後同定変更 (後出).
ヤナギバルイラソウ *Ruellia brittoniana* Leonard (田中, 2009. FK68: 828-829).
ホシケチドメグサ *Bowlesia incana* Ruitz et Pav. (勝山, 2010. FK69: 836; 勝山, 2010. 帰化植物写真図鑑第2巻, p.390) KPM-NA0136651; 0136653.
コバノヤマモモソウ *Gaura parviflora* Douglas (田中, 2010. FK69: 843) 茅ヶ崎 8528.
ツノアイアシ *Rottboellia cochinchinensis* (Lour.) Clayton (*Rottboellia exaltata* (L.) L f.) (岸・岸, 2011. FK73: 877) KPM-NA0137723-0137725.
マルバフウロ *Geranium rotundifolium* L. (佐々木ほか, 2011. FK73: 878-880) KPM-NA0162796.
アメリカフヨウ *Hibiscus hyssopifolia* L. (佐々木ほか, 2011. FK73: 878-880) KPM-NA0164934.
ヒメイワダレソウ *Lippia repens* Spreng. (佐々木ほか, 2011. FK73: 878-880) KPM-NA0161326; 0164910.
モクシュンギク (キバナマーガレット) *Argyranthemum frutescens* (L.) Sch.Bip. (佐々木ほか, 2011. FK73: 878-880) KPM-NA0164913.
ダールベルグデージー *Thymophylla tenuiloba* (DC.) Small (佐々木ほか, 2011. FK73: 878-880; 林, 2012. FK74: 890) KPM-NA0164905; 0147360.
オオハタガヤ *Bulbostylis puberula* (Poir.) C. B. Clarke (勝山, 2012. FK74: 884-885.) KPM-NA0165999.
カロライナツユクサ *Commelina caroliniana* Walter (勝山, 2013. FK75: 896-900) KPM-NA0133017; HCM-97721.
Commelina erecta L. (勝山, 2013. FK75: 896-900). KPM-NA0000714; HCM-71448; KPM-NA0210825
ほか. ※シュッコンツユクサの和名 (浅山, 1986. 園芸植物図譜. p.495)がある (勝山, 私信).
アサハタヤガミスゲ *Carex longii* Mack. (勝山, 2013. 神奈川県博研報 (42): 7-12) KPM-NA0125740; 0061904.
キヌイトツメクサ *Sagina decumbens* (Ell.) Torr. et A.Gray (勝山, 2013. FK76: 908-909) KPM-NA0202811. ※KPM-NA0202811はイトツメクサ *Sagina apetala* Ard. に同定が変更された (勝山,

私信).

イトハネガヤ *Nassella tenuissima* (Trin.) Barkworth (勝山, 2013. FK77: 915-916) KPM-NA0212305; 0212306.

アレチアミガサソウ (仮称) *Acalypha setosa* A Rich (秋山, 2013. FK77: 916-917).

シマイボクサ *Murdannia loriformis* (Hassk.) R.S.Rao & Kammathy (伊藤, 2014. FK78: 926-927) KPM-NA0169486 ※国内帰化?.

引用文献.

神奈川県植物誌調査会編, 1988. 神奈川県植物誌 1988. 1442pp. 神奈川県立博物館, 横浜..

神奈川県植物誌調査会編, 2001. 神奈川県植物誌 2001. 1582pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

田中徳久・勝山輝男・木場英久, 2002. 「神奈川県植物誌 2001」で新たに記録された植物と絶滅した植物. *Flora Kanagawa*, (52): 631-633.

「西湘シダ勉強会」の紹介と2014年度の活動記録

(中山博子)

「西湘シダ勉強会」は、野外でのシダ植物の見分け方から、標本作成まで、楽しみながら無理せずに勉強をすることを活動方針とした会です。2012年4月より、毎月第3火曜日に小田原・真鶴・湯河原・南足柄地域を散策し、シダを中心とした植物を観察しています。西湘ブロックの遊撃手的なフロラ調査を兼ねていますが、標本作成に関しては、平等でなくても、出来る時に出来る人が出来る事をするというゆるやかな会です。代表者は特別に決めておりませんが、中山が連絡・世話係を担当しています。また、シダ植物に明るい、小田原の松岡輝宏さん、伊東の佐藤康さんが参加されています。神奈川県植物誌調査会の会員の方でしたら、どなたでもご参加を歓迎いたします。※参加のご希望は調査会事務局で取り次ぎます。

以下に2014年度の活動記録を報告します。

調査日: 2014年4月15日

調査地: 真鶴町岩 MAN

参加者: 金子龍次・小林力・倉川典夫・倉本弘美・佐藤康・関野祥子・長岡恂・中山博子・日置乃武子・松岡輝宏・和田良子 11名

コース: 真鶴駅前～役場前～岩海岸～岩 IC 付近～真鶴駅

概要: 岩海岸で、ハマホラシノブ、ヒメオニヤブ

ソテツなど海岸性のシダ植物を調査した。

調査日：2014年5月20日

調査地：小田原市久野 OD-1

参加者：浅川久子・金子・倉川・倉本・佐藤・関野・恒川礼子・中山・長岡・浜岡史子・日置・松岡・山本絢子 14名

コース：県博～水之尾水源池～塔ノ峰林道ゲート前駐車～塔ノ峰林道

概要：塔ノ峰林道にて、以前見ていたオオバノトンボソウを探したが、見つからず、オクエゾスギナ、イヌイワヘゴなどを記録した。

調査日：2014年6月17日

調査地：小田原市根府川 OD-4

参加者：浅川・金子・倉川・倉本・佐藤・関野・恒川・中山・埜村・浜岡・日置・松浦ヤチヨ・松岡・和田 14名

コース：根府川駅前～白糸川への分岐～白糸川上流～きのこ苑付近～林道

概要：白糸川に沿って歩き、テリハヤブソテツ、ハタジュクイノデ、ナガバヤブソテツとヤマヤブソテツの雑種であるマムシヤブソテツを記録した。

調査日：2014年7月15日

調査地：小田原市根府川 OD-4

参加者：浅川・伊藤晃逸・北山紀代子・金子・佐藤・恒川・中山・船木・松岡・松浦・和田 11名

コース：根府川駅～牧谷川～ヒルトンホテル～オレンジ橋～根府川駅

概要：道沿いの石垣でアイトキワトラノオを記録、牧谷川でオオヒメワラビなどを記録した。

調査日：2014年8月19日

調査地：真鶴町岩 岩沢川 MAN

参加者：浅川・金子・北山・佐藤・中山・浜岡・日置・船木・松岡・松浦 10名

コース：車で岩沢橋まで～採石場～岩沢川に沿った林道を往復

概要：オオキジノオの群落、ホソバノコギリシダなど真鶴町初産のシダを記録した。

調査日：2014年9月16日

調査地：小田原市豊川・桑原・鬼柳 OD-3

参加者：浅川・金子・倉川・倉本・小林・佐藤・関野・恒川・長岡・中山・日置・松浦・松岡・和田 14名

コース：小田原駅から車で豊川～桑原～鬼柳を回った。

概要：休耕田や水田でミズワラビ、ウスモトツクサ、デンジソウ、イヌケホシダ、スプタ、ト

リゲモなどを記録した。

調査日：2014年10月21日

調査地：小田原市久野船原 OD-1 ・柳新田 OD-2

参加者：中山・松浦・松岡 3名

コース：小田原駅から車で船原～鬼柳を回る。

概要：朝方小雨が降る。クレスン田などでイヌケホシダ、アブノメ、ホシクサ、イボウキクサ、帰化のアカウキクサを記録した。

調査日：2014年11月3日

調査地：小田原市根府川（牧谷川・白糸川）

OD-4

参加者：石田祐子・中山・松浦・松岡 4名

コース：小田原駅～根府川牧谷川上流～川沿いに探索。

概要：OD-4で田圃や湿地を探した。牧谷川上流と白糸川上流へ行ったが田圃は見つからなかった。

調査日：2014年11月18日

調査地：真鶴町岩 岩沢川 MAN

参加者：伊藤・金子・倉川・小林・佐藤・関野・恒川・長岡・中山・松浦・松岡・和田 12名

コース：早川駅～真鶴町岩沢橋～採石場～岩沢川に沿った林道～対岸～林道を往復。

概要：8月と同じルートを行ったが、林道拡張の工事が始まっていて、先に進めず対岸を歩く。岩沢橋付近の法面で、ヨシススキを記録した。

調査日：2015年1月20日

調査地：静岡県下田市爪木崎～須崎

参加者：今井・金子・佐藤・関野・埜村・長岡・中山・浜岡・和田 9名

コース：爪木崎入口～御用邸下の浜～爪木崎～須崎海岸～須崎海岸バス停

概要：オニヤブソテツ、ヒメオニヤブソテツ、コハシゴシダ、ヒメハシゴシダ、雑種のヒメコハシゴシダ、ハマホラシノブ、ホラシノブ、雑種のアイホラシノブなどを観察。

ある日の「澤田日記」

(三樹和博)

先日、『澤田武太郎植物日記』をめくっていて、ふとある日の記録に目が留まった。本編の321頁「28 VIII. 1933」に「ハコネダケ苗」とだけ記されている。この日記は明治32年から昭和13年まで、澤田氏が主に箱根で採集した植物やそのスケッチなどが記録されているもので、この記述も多分採集の記録

だと思われる。しかしハコネダケの後の「苗」というのが解せず、解説編を見たがなんの説明も無く、同じ記述が活字化されているのみ（本編は澤田氏の手書きの筆跡のままのもの）。1933は昭和8年を指し、澤田氏が昭和8年に「ハコネダケ苗」を箱根のどこかで確認したと書き残している訳だ。箱根の自然史に詳しい方はもうピンとくるかもしれないが、筆者はもう一冊別の本を引っ張り出し、やっと「ハコネダケ苗」の謎解きにたどりついた。その一冊が『サルのごぶとん』（田代道彌, 1990）であって、その第九章に「まぼろしの赤いハタネズミ」というドキュメントが綴られている。そして「苗」というのは言うまでもなく、ハコネダケの実生の苗であろう。これでもまだピンと来ない方のために解説すると、箱根では昭和8年から11年ごろにかけてハコネダケの一斉開花がおこった。この田代氏の著作は、その後におこったハタネズミの大増殖までの顛

末を記録している。ハコネダケというのはアズマネザサにごく近いメダケ属の種なので、種子の発芽には休眠がない。実際には、このときの一斉開花は数年前からその前触れのような開花が始まっていたらしいが、一斉に開花結実を迎えた昭和8年の夏、汗を拭き拭き歩いた箱根のどこかで、自然発芽の小苗を、澤田氏は採集したのかもしれない。そしてそれが事実なら、その内どこかの標本庫で出会えるかもしれないと思っている。標本作りの名人としてあの牧野富太郎も舌を巻いたという見事な標本と。

文献

神奈川県レッドデータ生物調査団編, 1995.『澤田武太郎植物日記』. 257pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

田代道彌, 1990. サルのごぶとん. 259pp. 神奈川県新聞社, 横浜..

植物誌の直し方

(木場英久)

私の使っている『神奈川県植物誌 2001』は2007年ごろに本体がカバーから外れてしまいました。会員のみなさんにお聞きしてみると、同じような経験をされている方がたくさんいらっしゃるようでした。少なくとも次の植物誌ができるまでは、まだ現役バリバリで働いてもらいたいと思います。見栄えが悪くてよいから、もとの本の体裁に戻したいと思い、ホームページや修理法の本を参考にして修理

を行いましたので紹介いたします。

本の構造と壊れた部位

図1は植物誌を上から見た図です。本体とハードカバー（つまり、表紙と背表紙と裏表紙）は、紺色の「見返し」という紙と、「寒冷紗」という布だけでつながっています。見返しは、表紙や裏表紙に貼りつけてある部分を「きき紙（または力紙）」といい、本体側の半分を「遊び紙」といいます。私の植物誌は、見返しのきき紙と遊び紙の間の部

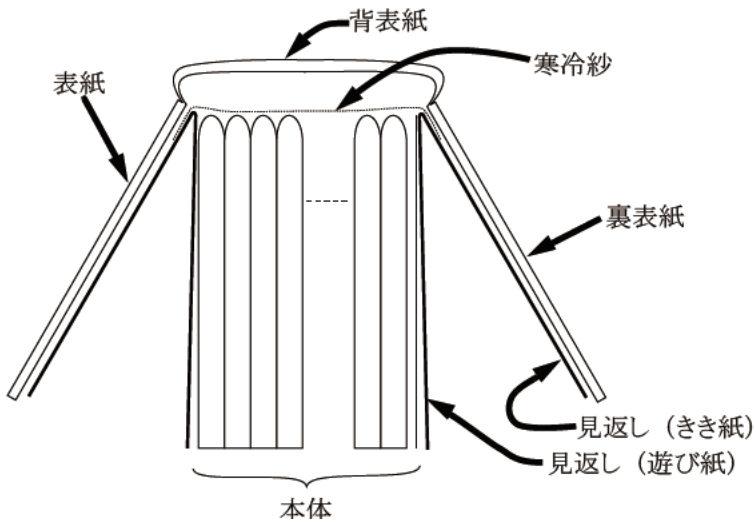


図1. 本の各部分名称.



図2. 壊れた植物誌.

分と寒冷紗が切れて、ハードカバーと本体が分かれてしまいました。何度も開閉するうちに見返しと寒冷紗が痛み、本体の重さを支えきれなかったためにこういうことが起きたと考えられます。

さらに、奥付のページもそれ以前の部分から外れてしまいました(図2)。きっと奥付のページは、その前のページとの間で折りが分かっていたので、外れやすかったのだと思います。

修理のために準備するもの

見返し2枚、寒冷紗のほか、クラフト紙、接着剤などです。

寒冷紗は丈夫な繊維でできた目の粗い布で、裏打ちキャラコともいうそうです。東急ハンズの横浜店で「裏打ち寒冷紗」(製本工房リーブル製、税込262円)というのを売っていました(ちなみに町田店には植物誌の背の厚さに対応できるようなものはおいてありませんでした。大きい画材屋さんでも手に入りませんでした)。見返しの紙は同じくハンズで、似たような色と質のものを買いました。クラフト紙は中古の角2サイズの封筒を使いました。接着剤は「再度の修復をするなら剥がせるようなものがよい」ということでしたが、とにかく直ればよいと思っていたので手近な木工用ボンドを使いました。

作業

(1) 下準備

破れてしまった見返しの遊び紙をはがします。

遊び紙は、数mmの幅で本体に接着されています。これをゆっくりと力をかけて、本体から剥がします(図3)。

本体の背がわにはボロボロになった灰色の紙がついていたので、それもピンセットや爪などを使って丁寧にはぎ取りました(図4)。時間がかかりますが、うまく剥けると快感です。

表紙と裏表紙の内側の見返し(きき紙)の端とはみ出している古い寒冷紗を、カッターナイフで切りながら取り除きます(図5)。ここまで、直しているというよりは、壊しているという意識のほうが強く、心配になりました。背表紙の内側のボール紙がめくれてきていたので、ボンドで布に貼りつけました(図6)。

(2) 奥付のページを本体につける。

奥付のページの左端に数ミリの幅でボンドを塗って、本体に接着します。貼りつけてみると、次の折との間、つまり1570ページと1571ページの間も外れかかっているのに気付いたので、そこにも少量のボンドを塗って補強しました。幅が広いほど丈夫になるが、開きにくくなるので、狭い範囲を接着することになります。ちょっとだけ、直している気分がしはじめました。

(3) 寒冷紗を本体に貼る。

寒冷紗(裏打ちキャラコ)を(本体の高さ+10mm)×(本体の幅+40mm)ぐらいに切りまします。植物誌はA4判で厚さ75mmなので、310×



図3. 本体から遊び紙を外す。



図4. 背側のボール紙を剥がす。



図5. 余分な寒冷紗の除去。



図6. 背表紙のボール紙をボンドで貼る。



図7. 寒冷紗を必要な大きさに切る。



図8. 本体の背にボンドを塗る。

120mm に切りました (図 7)。本体の背側にボンドを塗り (図 8)、寒冷紗 (つるつるした面) を貼ります (図 9)。シワができれば寒冷紗をよくひっぱり、こすってシワをなくします。糊付けした部分がしっかり接着するように、重しをして乾かします。

(4) クータをつくる。

クータとは本体の背と背表紙の間につける筒状の紙のことで、表紙を開閉しやすくし、しかも本体と背表紙をつなぐ強度も上げる役割をもっているようです。クータの材料はクラフト紙とありますが、厚手の封筒でもよいそうです。(本体の高さ - 1mm) × (本体の厚みの 3 倍弱) のクラフ

ト紙 (図 10) を、本体の厚みのところで三つ折りにして、重なった部分に糊づけしてクータを作ります。

ここでよく乾燥させる必要があるので、一日目の作業はここまで。

(5) 本体の背とクータを接着する。

本体の背の天地からはみ出した寒冷紗を切り捨てます (図 11)。紙が一重の方を本体側にして、クータを本体にボンドで貼り付けます (図 12)。寒冷紗の方が凸凹しているので、寒冷紗にボンドを塗った方が、作業が容易でした。輪ゴムを数本かけて、本体とクータを圧着させて乾燥させます (図 13)。

ここでまた、ボンドを乾燥させるので、二日目



図 9. 寒冷紗を本体に貼る。

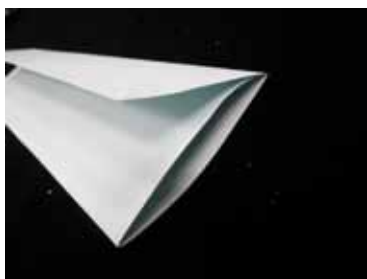


図 10. クータ。



図 11. はみ出した寒冷紗を切る。



図 12. クータを本体に貼る。



図 13. 本体とクータを輪ゴムで圧着させる。

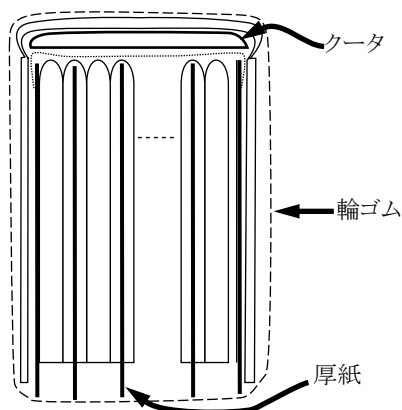


図 14. 輪ゴムで背表紙とクータを圧着させる。



図 15. 見返しを貼る。

はここまで。

(6) クータとハードカバーを接着する。

ボンドで、クータとハードカバーを接着させます。カバーに本体を押し付けながら乾燥させたいのですが、本体のページ幅より、ハードカバーの幅の方が長いので、ただ輪ゴムをかけたのでは力がかかりません。そこで図14のように本体にカバーのページよりも幅の広い厚紙か下敷きなどをはさんでから、輪ゴムを数本かけます。私はクリアフォルダをはさみましたが、少し強度不足だったかもしれません。

ここでまた、ボンドを乾燥させるので、三日目はここまで。

(7) 見返しを本体に貼る

A3判の見返しの紙を正確に二つに折ります。折った側の片側（遊び紙の折り目近く）に幅5mmほどボンドを塗って、本体の両側に見返しを接着します。

(8) 表紙にはみ出した寒冷紗をつける。

本来ならば古い見返しと表紙の厚紙を剥し、その間に寒冷紗が入るようにして、寒冷紗を貼るのですが、植物誌の場合、表紙の厚紙と見返しはかなり緊密にくっついていて剥がれそうにありませ

ん。そこで、少々の見栄えは犠牲にして、古い見返しは残したままで、その上に寒冷紗を貼ることにしました。寒冷紗に隙間なくボンドを塗って、溝から背表紙にかけて貼りつけます（図15）。多少、ボンドがはみ出しても、そこはあとで新しい見返しに隠れるので気にしなくて大丈夫です。

(9) 見返しを貼る。

さらに継ぎ目の強度を上げ、寒冷紗を隠すために、旧見返しの上に新しい見返しの紙を貼ります。新しい見返しの「きき紙」になる部分にボンドを塗ります。とくに寒冷紗のある辺りと見返しの縁は念入りにボンドを塗ります。この作業はのんびりしていると、ボンドを吸って見返しが柔らかくなったり、伸びてシワが寄ったりするので、手早くやる必要があります。今回の作業で一番緊張するところです。重しを乗せて一晩乾燥させ、これで完成です。私は念のため1週間ほど使わずに置いておきました。

この修理をしてから1年間が経ちましたが、壊れることなく使用しています。もっと早くこれをやればよかったと思いました。

2014年9月から2015年1月までの植物誌勉強会

(勝山輝男・田中徳久・支倉千賀子)

2014年9月7日「ゴマノハグサ科アゼトウガラシ属とシソ科イヌコウジュ属」(勝山輝男)

『神奈川県植物誌2001』のアゼトウガラシ属検索表とこれまでに集められた神奈川県産の標本を用いて、アゼナ、アメリカアゼナ、タケトアゼナの区別を確認した。ヒメアメリカアゼナについては、堀内氏がFlora Kanagawa No.54 (2003)にヒメアメリカアゼナの花柄には微細な腺毛があることが良い区別点になることと、『神奈川県植物誌2001』に引用された2点のヒメアメリカアゼナの標本はいずれも花柄の長いアゼナであったことを報告している。そこで、堀内氏がヒメアメリカアゼナと同定した山梨県都留市産の標本(KPM-NA0123019)を用いて花柄の腺毛を確認し、併せて『神奈川県植物誌2001』でヒメアメリカアゼナと誤認した花柄の長い型のアゼナを検討した。

次にアゼトウガラシ、ヒロハズメノトウガラシ、エダウチズメノトウガラシについて標本と検索表を用いて確認した。

続いてシソ科イヌコウジュ属。イヌコウジュ、ヒメジソ、シラゲヒメジソについて葉形、花序軸



図1. ヤマジソ (足柄上郡山北町三国林道 2014.9.14 勝山輝男 撮影)。

の毛、萼筒の毛の違いを確認した。シラゲヒメジソは葉の両面に白色軟毛があるのが良い識別点になる。また、ヤマジソは見たことのない会員が多いので標本を見ていただいた。県西山地の林道路傍や裸地などに、高さ 10cm 以下の小さな個体が多い。標本であっても一度見ていると野外で発見しやすくなる。今回の勉強会后、南足柄市や山北町でヤマジソが発見されている。

10月12日「アカバナ科のチョウジタデとウスゲチョウジタデの区別、ミソハギ科のヒメミソハギとホソバヒメミソハギの区別、水田にはえる小さな植物」(勝山輝男)

最初のチョウジタデとウスゲチョウジタデは区別が悩ましいものである。『神奈川県植物誌 2001』では全草無毛、萼片 4 枚、果実が浅く 4 稜があるものがチョウジタデ、全草有毛、萼片 5 枚、果実に溝がないのがウスゲチョウジタデとされているが、いずれの形質も必ずしも安定したものではない。このほか、ウスゲチョウジタデの花弁は明らかに大きいこと、花床には毛があることも識別点として使えそうである。

水田にはえる小さな植物はアズマツメクサ(ベンケイソウ科)、ミズマツバ(ミソハギ科)、ミソハコベ(ミゾハコベ科)、ミズハコベ(アワゴケ科)、スズメノハコベ(ゴマノハグサ科)を標本で観察した。

11月8日「カヤツリグサ科テンツキ属」(勝山輝男)

テンツキとクグテンツキ、ヤマイとイソヤマテンツキ、イソヤマテンツキとナガボテンツキ、テンツキとクロテンツキ、ヒメヒラテンツキとヒデリコ、ヒメヒラテンツキとアゼンテンツキ類、アゼンツキとメアゼンツキ、コアゼンツキの違いなど、似ていて間違いやすいものを比較した。

11月16日「富士竹類植物園」(支倉千賀子)

富士竹類植物園の柏木治次氏にホウライチク属、マダケ属、メダケ属リュウキュウチク節、ナリヒラダケ属を中心に解説いただき、その後、インヨウチク属、ササ属、アズマザサ属等を観察。南方系のタケ類であるホウライチク属ではホウライチク、ホウオウチク、コマチダケを観察。葉には並行脈だけで横脈がみられないこととコマチダケは稈が空洞でないことを実際に確認。コマチダケの葉は他 2 種の中間的な大きさで神奈川県内にも植栽起源のものが逸出して野化している可能性があるとのことであった。枯れた細い稈を折ってみればすぐ確認可能とのことである(小さい穴があいていることがある)。マダケ属では特にマダケ、

ハチクの見分け方を中心に教わった。稈痕とすぐ上の膨出部分は合わせて節でありマダケではともに同じ高さ、ハチクでは膨出部分の方が高い。リュウキュウチク節ではタイミンチク、リュウキュウチクを観察。タイミンチクの葉は先端がねじれてやや垂れ下がること、稈が無毛であることで見分けるがどうやらタイミンチクでも毛が出ることもあるらしく見分けが難しい一群となっている。いずれも神奈川県では海岸部や西部に植栽起源のものが逸出し広がっている。

12月6日「植物の名前の話」(田中徳久)

標準和名、分類階級、植物命名規約、種の学名、命名者、種内分類群の学名、自動名、組換え名など、植物の和名や学名の仕組みについて解説した。

2015年1月10日「ブナ科の樹木」(勝山輝男)

常緑カン類として主にアラカシ、シラカシ、ウラジロガシ、アカガシ、ツクバネガシの違いについて標本で確認した。その後、マテバシイとシリブカガシ(神奈川県には自生しない)、葉 1 枚でクリとクヌギを見分ける、ナラガシワ、コガシワ(カシワ×コナラ)、ホソバガシワ(カシワ×ミズナラ)などを観察した。

編集委員会報告

(事務局)

2015年1月24日(土)、神奈川県立生命の星・地球博物館で開催されました。まずは、メンバーも仮とし(今後の議論で、必要に応じて新しく加わっていただく方もいるかもしれない)、新しい植物誌の配列や、改訂の程度いよる『神植誌 88』や『神植誌 01』の執筆者名の扱いなどについて、議論が行われましたので、以下に簡単に報告します。

①編集委員：秋山幸也・内山 寛・大西 亘・大場達之・大森雄治・岡 武利・勝山輝男・城川四郎・木場英久・佐々木あや子・関口克己・田中徳久・支倉千賀子(今回の出席者に下線を付した)。

②配列：種子植物については、APG を基本とする。※各標本庫の配列は別の問題で、今後、個別に検討する。

③執筆者名の表記：改訂の程度をパターン化し、『神植誌 88』・『神植誌 01』の執筆者名を残しつつ、新しい植物誌の原稿の確認者、改訂者、執筆者を表記する。

④執筆者：『神植誌 01』の執筆者の意思確認を行い、編集委員会で案を作成するが、新しい執筆者を積極的に発掘する。

目次

勝山輝男：神奈川県のパンケイソウ属 <i>Hylotelephium</i> H. Ohba	923
勝山輝男：小田原市久野で採集されたリトウザンヨモギ <i>Artemisia anomala</i> S. Moore	925
田村 淳・中西のりこ・指村奈穂子・長澤展子・野辺陽子：56年ぶりのタチヒ メワラビの発見	926
中島 稔：横浜市にオオバクサフジが残されている	927
大西 亘：分布を拡大するヨシススキ	928
田中徳久：『神奈川県植物誌 2001』刊行後に記録された神奈川県新産の帰化植物	929
中山博子：「西湘シダ勉強会」の紹介と 2014 年度の活動記録	931
三樹和博：ある日の「澤田日記」	932
木場英久：植物誌の直し方	933
勝山輝男・田中徳久・支倉千賀子：2014 年 9 月から 2015 年 1 月までの 植物誌勉強会	936
事務局：編集委員会報告	937
事務局：堀川美哉氏ご逝去	938
総会の案内	938
編集後記	938

総会のご案内

2015 年度の総会を 2015 年 4 月 5 日（日）
13：30 ～、神奈川県立生命の星・地球博物館
で開催します。総会終了後には、新しい植物
誌のための調査の進展状況や課題について、
話題提供の予定です。万障、お繰り合わせの上、
ご参集ください。

編集後記

本郷の原稿募集を ML に流し、編集作業に入ろ
うとしていたころ、木場英久氏から、『植物誌の
直し方』との原稿が届いた。折も折、次の植物誌
へ向けて、編集委員会の日程も決め、議題をどう
しようか、と思っていたタイミングだったので、
新しい植物誌の内容に対するアイデアや直すべき
内容などの『植物誌の直し方』原稿が届いたと思っ
た。「さすが、元事務局員」と感激した。ところ
がである。今号に掲載したように、本当の『植物
誌の直し方』であった。確かにタイトルがおかし
いとは思ったのだが…。

『神植誌 01』の刊行は、神奈川県予算を使用
したため、入札により最も安価な業者に発注した。
結果、印刷品質にしろ、製本にしろ、今一つの感
は否めない。会員の皆さんも、植物誌を直し、新
しい植物誌の調査にもうしばらくご活用下さい。
※木場さん、決して原稿を批判しているわけでは
ありませんので…。

また、編集委員会の報告にあるように、新しい
植物誌の執筆者に加わって頂ける方を募集してい
ます。事務局や編集委員会でも、協力に手助けし
ますので、ぜひ、名乗りをお上げください。

(田中徳久)

横浜ブロックの堀川美哉氏ご逝去

(事務局)

前号でお知らせすべきでしたが、紙数の関係で今
号でお知らせさせていただきました。

横浜ブロックの事務局を長く背負って頂いてい
た堀川美哉氏が、2014 年 2 月 13 日、ご逝去され
ました。横浜ブロックは、神奈川県立博物館が横
浜を離れ、生命の星・地球博物館として、小田原
市に移転、開館するのに併せ、『神植誌 01』の調
査に向け、横浜市こども植物園を新たな拠点とし
ました。こども植物園には、標本を管理する職員
が配置されていないこともあり、横浜植物会が標
本管理に携わっていますが、堀川氏は、横浜植物
会の事務局を長くされておられた関係もあり、横
浜ブロックの事務局もお引き受けていただいでい
ました。

堀川美哉氏は、生命の星・地球博物館の開設準
備室にもお勤めになっていたこともあり、勝山、
木場、田中は、個人的にも親しくさせて頂いてお
りました。堀川氏のご冥福をお祈り致します。

神奈川県植物誌調査会

〒250-0031 小田原市入生田 499
神奈川県立生命の星・地球博物館内
TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846
e-mail kana-syoku@nh.kanagawa-museum.jp
郵便振替 00230-5-10195
加入者名 神奈川県植物誌調査会
年会費 2,000 円